

〈コラム〉

運動部活動における体罰（暴力的指導）を考える

形本 静夫*

Some considerations on corporal punishment (violent coaching)
in athletic club activities

Shizuo KATAMOTO*

このところ、繰り返し報道されるスポーツ活動指導時の体罰（暴力）問題。正直言って、あきれられるばかりである。私は中学から大学まで運動部活動（陸上競技）を行ってきたが、一度もそういうことを経験したことがなく、信じられない気持ちである。大学で入部したときも、当時の主務から、「権威や体力に頼らない説明の大切さ」を諭された記憶が鮮明に残っている。しかし怪我で入院中に、このような問題が、中等教育や高等教育のみならず、日本代表レベルにおいても行われていることが報じられた。選手が指導者の思い通りに動かなかった、試合で負けた、などを理由になぜこのようなことが行われてしまうのか。運動部の指導に関わってきた一人として、発言することの必要性を強く感じた。そこで、運動部活動における暴力的な指導回避の一助となればと思い、私なりに考えたことを思うがままに記すことにした。

1. 選手の失敗は指導者が学ぶ絶好の機会である

そもそも、選手が指導者の思うとおりに動かなかった（動けなかった）ということは、指導の成果があがっていない証拠が示されただけではないのか。一生懸命やった結果であれば、選手側には何の落ち

度もない、と私は考えている。むしろ、指導が適切ではなかったか、あるいは目標達成に相応しいスキルや体力が身に付いていなかったことが、具体的に示されたと考えるべきではないのか。言い換えれば、指導者にとっては絶好の勉強の機会が与えられたことになる。本来なら感謝しなければいけないはずで、選手を殴る・蹴るなどは、見当違いも甚だしいと言える。試合に勝てないのも、そのために必要なスキルや戦術、体力、意志力が身に付いていない証と考え、それを克服するにはどうしたらよいか、改善策を考え選手に伝えて実行させていくのが指導者の役目ではないのか。

もし、意欲や振る舞いに問題があったのであれば、それがなぜ良いことではないかを説明するとともに、何がそうさせたのか、自分の指導や選手のメンタルヘルスに問題はなかったのか、などを考えるのが指導者の仕事であり、暴力的な指導の根拠とは決してならないはずである。運動部活動における体罰は、指導力の無さを権威や暴力でマスクし、あたかもそれを行使することが指導力であると錯覚している結果であると思えない。しかし、よい結果が出ると指導者の問題行為も美化され、やがて風化されてしまう傾向にあるから一向に変わらないのではないのか。

2. 成長期にある選手の指導成功には落とし穴がある

選手が成長期にある場合は、たとえ指導法が適切

* 自転車競技部監督・大学院スポーツ健康科学研究科
研究科長

Manager of competitive cycling club and dean of
graduate school of health and sports science

ではなくても、トレーニングさえさせていけば、自然の発育発達に伴い容易に競技力が向上する傾向にある。ここに、指導法に対する点検評価が甘くなり、熱心な指導＝成功成果＝正しい指導、という誤った理解が生まれ、暴力的な指導に対する寛容な姿勢を当事者はもちろんのこと、周囲にも持たせてしまうことが懸念される。成長期にある選手の指導者は、この点をよく理解しなければならない。選手も周囲の者もそうだと思われる。

3. 指導者は成功成果の蓄積に気をつける

また忘れてならないのは、成功成果の蓄積は、間違いなく指導者に莫大なエネルギーの蓄積をもたらすということである。したがって、指導者に謙虚さが欠けると、巨大な権威となって選手や保護者の前に立ち上がる可能性が高い。それが暴力的指導を生み出し、周囲もそれを忍耐し、許容することにつながっていることが予想される。しかし、指導者の選手に対する暴力行為が繰り返されれば、誰もが知るところとなることは間違いない。例えそうであっても、それが正面切って批判に晒されることが極めて稀なのは、ほかにも要因がありそうである。

大人になれば、人は誰もが大きなエネルギーを持つようになる。したがって、大人がエネルギー保有量の小さい子供に注意することは簡単でも、同格の大人に注意することはなかなか難しい。これは、誰もが経験することであろう。それを可能にするのが、地位や身分であり、名声であると思われる。換言すれば、いったん高い評価を受けた指導者は、自ら襟を正さない限り、批判しにくい対象となってしまう。そのため、暴力行為も見て見ぬふりされることが多くなり、日常的に繰り返されることになるのではないか。

4. 見て見ぬ振りは同罪である

最近中等教育の場で起きた事件は、その典型のように思われる。一人の尊い命まで奪うに至った暴力的指導の背景には、名声に支えられた指導者の存在が

あったことを否定することはできない。そして、その内容が本来なら許されるものではないことは、その組織に所属する者は誰もが知っていたに違いない。にもかかわらずそれが教育の場で起こり、なおかつ何のチェックシステムも作動することなく、最悪の結果を招いてしまったことは慙愧に堪えない。もはや、教育組織としての機能が完全にマヒしていたと言わざるを得ない。組織を構成するあらゆる階層の人々に、新入生を迎えられるだけのレディネスが担保されていたとも思えない、と評価されても仕方のない状態にあったと思われる。

一生懸命にやっている人もいる、在校生のことも考えろ、との議論もあるが、それはどうであろうか。私はそのようには思わない。事実を黙認し、結果的に1人の生徒を死に至らしめたことは、決して看過できない。知って知らぬふりをしたことがどんな結末をもたらしたのか、その免罪符は、教育に値しない組織を生み出し結果的にいわば犯罪に与してしまったことを猛省し、新たな改善策を徹底的に検討し具現化することによってしか与えられない、と得心するべきではないか。

5. 体罰はスポーツ文化の冒涇である

いずれにしろ、スポーツ指導の中で「殴る・蹴る」の暴力的な指導が闊歩し、忍耐され、認容される現状は至極残念なことである。そして、このような暴力的な指導や計画外の「懲罰的」トレーニングが当たり前のように行われる現状は、人類が幾多の歳月を重ねて醸成してきたスポーツという文化に唾するものでしかないのではないか。世のスポーツの指導者は、このことをしっかりと心に刻み込むべきであると思われる。いかなる理由付けがなされようとも、「気合を入れる」、「根性を鍛える」、「気持ちを奮い立たせる」などという美名のもとに、暴力的な指導が許されてはならない。日本のスポーツ界に存在する「風土病」として片づけてもらっては困るのである。